勝海舟

第一卷

了村

子母澤　寛

勝海舟

第一卷

黒船渡来

新潮社版

勝海舟（第一巻・黒船渡来）

昭和三十九年十二月二五日　発行
昭和四十九年　二　月　十　日　二四刷

著　者　子母澤　寛
発行者　佐藤　亮一
印刷所　多田印刷株式会社
製　本　新宿加藤製本所
発行所　株式会社　新潮社
郵便番号　一六二
東京都新宿区矢来町七一
電話東京(260)一一一一(代)
振替東京八〇八番
定価　六五〇円

乱丁本はお取りかえいたします

© Ryûichi Umetani Printed in Japan 1964

勝海舟

第一巻・黒船渡来

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.c

開眼

今日は、勝も、ずいぶん、みっちり身を入れて遣って行った。肱のところに血がにじんでいたようだ。

島田虎之助は、師匠の男谷精一郎から、特に言葉があって、自分のこの浅草新堀の道場へ来ている勝麟太郎という奴の、何処となく桁の外れたそれでいてちゃあーんと算盤の合うような如何にも妙な遣いぶりが、今日はしみじみ気に入った。

昼までで、門人達がみんな帰って行くと、道場は実に深閑として終う。虎之助は小さな庭のある一と間についた狭い縁側で、膝の前へ沢山木賊を散らかしながら、頻りに樫の木剣を磨いていた。

眼を上げると、青い空が見えるが、丁度その庭の真ん中に、まるでこの青空を見せまいとでもするように、大きな榎の木が枝を張って、その若葉の匂いが島田の着ている木綿の黒紋付に染みる程に強かった。

陽ざしが、葉のすきをもれて、ちらちらちらちら木剣へ流れて来る。

遠くから、飴売の太鼓の音が聞えて来た。と、一緒に、誰か、玄関で

「御免よ」

そんな声がしたような気がした。

師匠のお蔭で三軒つづきの長屋を借りて少し手を入れて二軒を道場に拵え、一番端の一軒へ自分が住んでいるこの小道場は、近所隣も近いので、その客が、果して自分のところかどうかを、確めようとしている中にまたつづけて

「居ねえのかえ。え、おい」

と客は早口に云った。

虎之助が、——何んだ無作法口をきく奴だ——そう思いながら木剣を磨く手をやめた時には、もう、女房のいないこの道場のたった一人の内弟子の大野文太が、その客と応接している声が聞えた。

「勝だよ、勝の隠居だよ」

虎之助は、大野の取次を待つ迄もなく、直ぐに立つと、白い小倉の袴の膝の埃を払って、玄関の方へ出て行った。

「おう、おのし、虎さんかえ」

麟太郎の父、勝小吉が、土間に立っていて、声をかけた。

虎之助は、一寸言葉が出なかった。

小吉は、月代の延びた頭に、腰までの黄色い短羽織を着

て、女のようなしゃれた小紋袷の着流し。上前の裾をちょいとつまみ上げているが、そこから緋縮緬の長襦袢が出ている。素足に雪駄、これを爪先きに半分程も突っかけて、しかも、腰には、おもちゃのような短い木刀が一本。

「倅がいつもいつも世話になり、心の中では有難てえともうれしいとも思っているが、どうにも埒くちもねえくらし故、思いながらも無沙汰をしたが、まア許しておくれよ。今日は、それや、これや、礼にやって来たという訳よ」

虎之助は、作法正しく手をつかえた。

「むさいところで御座いますが、どうぞお通り下さい」

小吉はうなずきながら

「御免よ」

気軽く上って来た。

大野は、眼をくるくるしていた。年はまだ二十六だが、師匠本所亀沢町の男谷精一郎を除いては、先ず江戸随一とさえ噂され出している島田の道場へ、これはまたなんというべら棒な来客だろう。

＊

ひと間へ通って、小吉は、まじまじと島田を見ていたが、

「おのし、男谷の道場では、滅法かんしゃくの虫を立て、みなみな痛い目に逢わされるというが、こっちでは手軟らかか倅も毎日無事にけえって来るね。もちっと、みしみし遣ってくれるがいいじゃあねえかえ」

「は」

島田は、逆うまいとしているようであった。小吉は、師匠の叔父である。掛違っていて逢うのは今日がはじめてであるが、三十七の若さで、小普請の身が隠居をさせられた程の人間である。小吉は幼名で、本当は左衛門太郎、隠居して夢酔と名をかえたが、誰一人、左衛門太郎とも夢酔とも云わない。

「ところで、どうだえ、倅は、物になるかえ」

「は？」

「男谷は、口がうめえから、何事も修行次第よなどと抜かすが、おのしは、まだ、九州から出て来て幾年にもならねえ故、江戸前の口うまにはなるまいから、おきき申すのだ、どうだえ麟太郎は」

島田は太い眉を少し上げた。そして、睫毛の濃い大きな眼を真っ正面に見すえて

「わたくしが申す迄もなく、あなた様は、すでに御存じの事と思いますが」

「いや、それがさ、親は馬鹿さ、子にはあめえよ、他人の事はわかっても、おのが子の事はわからねえものさ」

「しかし」

「云っておくれよ」
島田は少し黙っていた。そしてなお眼ばたきもせずに小吉の両眼を睨むようにしたまま
「剣術遣いにはなれません。剣術遣いになる剣術ではありません」
「ふむ？」
「それだけです」
小吉は幾度も幾度も、まるで、おもちゃの虎が首をうごかすようにうなずいた。そして
「流石だねえ、おのしは」
といった。それから、双方、なんにも云わなかった。
飴売の太鼓が、道場の横辺りへとまって、いつ迄もそこで叩いている。
「うるせえなあ」
小吉は、そういったが、島田は、やっぱり口をつぐんでいる。怒っているかな、小吉は腹の中でそう思った。
「先生」
と、島田は少し重く口を切った。
「わたくしは、田舎もので、江戸の事は一向にわかりませんが、どうも、江戸の武士は、風俗も悪く、服装なども、まるで女のような人間なども居り、青痰でも、吐きかけてやりたいと思いますが、先生は、どう御考えなさいますか」
島田は、さっきから、じろりじろりと、頭のてっぺんから爪の先迄、小吉の風態を見ているのである。小吉は、ふふんと笑った。そして
「おいらの姿なんぞも嫌えかえ」
島田は、何にも云わずに横を向いた。

*

小吉に、いろいろなわるさを仕掛けられて潰された道場が江戸には幾つもある。しかし、島田はそんな事などは、びくともしない。が、ただ、師匠の叔父である、それだけで、師匠に対すると同じ態度を忘れまいと努力した。
「先生は別です」
こういってのけて、島田は自分でも、ほっとした。
小吉と、島田が連立って、道場を出たのは、それから半刻ばかりの後であった。もう七つ時分を過ぎていた。
小吉が、島田は酒を飲まないといったら、それなら浅草に甘いものがある、初対面のちかづきに、そこまで御苦労を願いたいと、無理矢理引っ張り出して終ったのである。
「莨はどうだえ？」
「修業中故喫みません」
「ふふーん。そんな事でどうなるえ。莫ぐれえに敗けるようじゃあ江戸の修業は出来ねえよ。それより、ほうら見ね

忘、あすこに女が来る、いい女だろう。え」
「そうですな」
「あんなものだって、恐がっているようじゃあ本当の修業は出来ねえよ。おのし達は、堅くなって、こちこちに成るのを修業だとばかり思っているよ。そんな事じゃあ真物の人間は出来ねえね」
「は」
小吉は、女の方へ手招ぎをした。新堀端浄念寺の築土塀の前であった。
「おい。馬鹿におめかしをして、何処へ行くえ」
「ああら先生」
二十一二、綺麗ないい女だ。にこにこ顔で小吉の前へ小走りに寄った。
「虎さんや」
と小吉は島田を見て
「こ奴あね、浅草の奥山にいる水茶屋の女だが、これでいいところのある奴だ、亭主と云うか情夫というか、そ奴が巾着切でね、こ奴もいくらかはやるらしいが」
「まア、先生、飛んでもない、あたし、知りませんよ」
「お白洲じゃあねえんだ。知ってると云ったっていいんだよ。おれどもあ、これから、あっちへ行くところだ、お前先きへ行って、いい女をずらりと並べて置いてくれろ」
「ほんとでござんすか」
「本当だよ。この方あな、島田虎之助とおっしゃる江戸一の剣術遣いだ、怖えんだぞ、粗相のねえように——いいかえ」
女は、うなずいて、改めて島田へ一礼すると、とっとと、行って終った。
丁度その女とすれ違いに、四十がらみの侍が、みんな二十二、三の若い侍を五人つれて、同じ堀端の、東漸寺前の、駄菓子屋からぞろぞろ出て来るのと、小吉は、ばったりと顔を合せた。
「小吉だっ！」
誰かが叫んだ。忽ち六人はまるで焔でもかぶった時のような、興奮に駆り立てられた。
年上の一人が、つつとみんなの前へ飛出して来た。もう刀の欄へ手をかけている。
「小吉、前へ出ろっ」
しかしその小吉はにやにやしながら島田を振向いた。そして小声で
「今、喧嘩を見せて上げる。面白いものだ、御覧よ」

*

小吉は対手へ向って行くと共に、羽織を脱ぐと、さっと島田の方へ投げて寄こした。そして、それと同時に、一番

先きの奴へ、組みついて行った。それが悉く、瞬きをする間もない素早やさである。

小吉は、左手で対手の髷っぷしを鷲づかみにして、こっちへぐんぐん引っ張って来ながら、右手にはもう対手の刀を奪い取って、その峰で、対手の背中を叩きつけて

「真っ昼間、生くらなんぞを振廻しやがって、大べら棒奴、師匠の面汚したあうぬが事だ」

怒鳴りつけて、さて一段と大声で

「島田虎之助先生、こ奴らあ、みんな割下水の近藤弥之助先生のところの弟子さ。馬鹿ばかりで、こうして往来で、喧嘩を売る、いや飛んだ滅法界者だ。ちょいっと片づけて、直ぐに行く故、先生は、一足先きに奥山のさっきの女のところへ行って、お呉れよ、蛇の目屋ときけあすぐにわかるから、え」

こういうと、またぐんぐんと対手を押して、外の奴らの方へ出て行った。みんな刀をぬいたが、今島田という声をきいてぎっくりした様子である。

「さ、来ねえかよ、小吉が喧嘩の仕口を、手を取って教えてやる」

島田はすっかり閉口して終った。もう、一ぱいの人だかりになっている。真っ昼間、緋縮緬の長襦袢を着た侍が、暴れている、それが自分の連れと見えるさえ気まりが悪くて堪らない。といって、このまま行って終うことにも行かない。羽織を持たされてほんとに閉口している。

小吉は、またこっちへ戻って来た。そして、つかんだ対手を不意にぱっと押っ放して、よろよろと泳ぐように逃げて行くうしろから、さっと、一太刀軽るく浴びせた。

対手は襟っ首から袴の下まで斬り下ろされた。しかし、それは、着物も帯も袴も斬割られて、対手が殆ど、素っ裸になって、ひどく狼狽している醜態を其処に投出しただけで、別に一滴の血も出なかった。

「先生、え、是非お初のつき合いに御馳走がしたいのさ。先きに行っていてお呉れよ」

そう、もう一度、島田を促すと、また、敵中へ戻って行った。刀をこうふりかぶって

「どうだえ、見ろよ、小林隼太の褌は、めっぽう汚ねえじゃあねえかよ」

着物を斬られた小林は夢中になって逃げて行く。若い侍たちも、もう、小吉の科白などはきいてはいなかった。どんどん逃出していた。

「おう、刀あ要らねえのか、刀あよ」

小吉は、にやにやしながら、呼んだが、振向くものもなかった。お寺の前の、帯を敷いたような堀っぷちに、今の小林の着物や帯が、散らばって残されている。

小吉は、その上へ刀を投り出して
「これで喧嘩もやりつけると面白いものだよ、段々味が出て来るからね」
そう島田へいって
「連れが島田虎之助と聞いて、あ奴らあ、ふっ飛んで終ったよ、虎さん、おのしゃ江戸の鬼神だね」
島田は苦虫を咬み潰したような顔をして、黙っていた。

*

如何に四十俵の小禄で、不身持で隠居をさせられるような人間とは云いながら、これでも徳川の御家人、直参である。かねて噂にきいてはいたが、余りひどい。こんな処でこんな喧嘩をするのは市井の小無頼にも劣るではないか。この人が、かつては直心影近世の偉人と云われた藤川弥司郎右衛門の年回忌に六百人近い参会者の試合行司を勤め、下谷車坂の井上伝兵衛の年回忌にも勝負検分をした。殊には師匠男谷の道場開きにも取締行司を勤めたときくが、実に意外な話である。こうして見ると江戸の剣客の正体などというものも大抵底が知れているような気もする。
島田は、自分の師匠の叔父だなどとは信じたくない気持であった。
「どうだえ」
小吉は平気なものである。たった今の喧嘩などは、けろりと忘れたような顔つきで預けた羽織を受取りながら、
「勝は貧乏で、倅が、おのしの世話になっても、何一つの貢も出来ねえ。喧嘩なら資本がいらないこと故、いつでもお目にかけられると云うものさ。え、おのしの国の九州辺りでは、こんな喧嘩あなかなか見れねえだろう。今の奴あね、あれで近藤んところの目録だよ、とんと埒もない腕前さねえ。北割下水の能勢の妙見さまの講金の事で、おいらを恨んでいやがって、あんな喧嘩を仕掛けたが形もねえわさ」
まるで他人事のようにして先に立って、門跡の方へ向って歩いて行く。
島田は、何処で、どんな口実を設けて、なんといって、別れよう、それ許りを考えて、もう小吉の言葉などは少しも聞いてはいなかった。
青い空には、いつの間にやら、薄靄のようなものが、かかっていた。
春である。
新堀の水色は、乳色に光って、浄念寺前の辺りから薬師、抹香、こしやの小さな橋々が、北へ北へと並んでそこへ静かな影を投げ落し、寺の塀、町家の屋根もそのままうつし絵のように水に映っていた。
小吉は、俄かに少しどぎまぎした。
「ええ、これあいけねえよ。倅が向うからやって来やがっ

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.c

た。なんだってまあ、今頃こんなところへ来たものか――虎さん、実あおいらあ、倅がとんと苦手さ、あ奴ああれで、おいらに輪をかけた癇癪持よ、この、おやじどのの風態を見たら、何をやり出すか知れねえ故一寸の間、姿をかくそう。え、おのし、知らぬ顔で、一歩先に奥山へ行っててくれな。え、間違げえなく、え」

小吉は、島田の返事をきく間もなく、あわてて竜王寺の墓所の方へふっ飛んで行って終った。

島田は、ほっとした。まるで有難い救いの人に出逢ったような心地であった。

如何にも、勝麟太郎が、堀を越えた向い側の、小さな旗本屋敷の、黒い塀の前をこっちへやって来る。大切そうに包物を抱えている。書物のようである。

*

島田は手を上げて、勝、勝と呼んだ。その声は聞えなかったかも知れないが、麟太郎はすでに島田の姿を見ていたらしくすぐ馳足で、抹香橋を渡ってこっち側へ来た。

今の騒ぎを知っているのだろうかと思い乍ら、島田は、勝が、何にかいうのを待った。が、勝はまだ人だかりがあって、中には、こわごわ乍らすぐ鼻ッぱしからじろじろ島田の方を見ている人などもいるのに、そんなことは眼にも入らぬ風で、丁寧にお辞儀をしてから、

「どちらへ、お出ましでございますか」

といった。

「お前は？」

「これから先生をお訪ね申そうと思うて参りました」

「そうか。それじゃア道場へ戻ろう。いや、戻ろう。わたしも外へ行くのが忌やになったところだ」

島田は、すぐ道を引返して歩き出した。

「何処ぞへ行って来たのか」

「はい。牛島弘福寺の参禅の同行で本多貢という同年のものがあすこの組屋敷（くみやしき）に居りまして」

勝は抹香橋の彼方に屋根を並べている御書院番の組屋敷を振返って

「長崎にいられる長兄から届いた荷物を解いたら、面白い書物が入っている、見に来ぬかとの言づけがございましたので、見せて貰いに参りました」

「それか？」

島田の眼は、勝の抱えている包へ行った。

「これではありません、これはわたしに読めそうな漢書を二冊借りて参ったのです。長崎からの本というのは蘭書で、わたくしにはまるで読めないので只絵図だけを見ました。大砲やら小筒やらと思われる絵図が沢山入って居りました」

「長兄というのは、長崎で何にをしている仁だろう」
「高島四郎太夫先生の門下で、蘭学、洋兵式などを学んでいられるそうで御座います。病弱で、近々に高島先生が江戸へ参られるにお供をされて一応学問を止めて帰られるので荷物だけを先送りしたもののようです」
「そうか、わたしも秋帆先生が江戸へとの噂をきいていたが、それではいよいよ事実だな」
「事実でございましょう——それについて、勝は少々先生にお尋ね申したいことがあるのです」
「何んだ？」
「それは」
勝が、こういうと、島田は、小さくうなずいて、
「うむ、うむ。そうか。わかった、わかった。兎に角、道場で」
勝が、島田道場の一室で、話している間に、暗くなって終った。島田は、内弟子の文太に云いつけて、蕎麦を取り、行燈の脇に寄り集って、それを食べ乍ら
「蘭書と云えども人間の書いた文字である、人間の書いた文字を人間が読めないというのは如何にも心外だ、わたしは今日から蘭学を勉強いたしますというお前の覚悟は甚だ結構だ。やれ、大いにやれ、が、勝」
島田はじっと麟太郎を見た。

*

「学問はいい。しかし剣術も止めるなよ。剣術は己れを捨てて直々に神を見、仏を見る修行だ。一生のものだぞ」
島田は繰返して、二度、同じことを云った。勝は、瞬きもしない師匠のその眼光の下に、いつの間にか、持っていた箸を置き、両手を畳へついて、はい、はい、大きくうなずいた。
勝が、道場を出たのは、もう五つ過ぎであった。朧月が出て、街から街は、いかにも春の夜らしかった。
その頃、父の小吉は、本所二つ目の古道具の市に大胡坐で坐っていた。
昼、島田の道場へ行った時の、羽織も長襦袢も着ていないが、あの袷に、今度は本物の大刀を横へ置いて、ごたごたと道具を積上げた市の、横の一段高いところへ、大座蒲団を敷いて、そこに胡坐をかいているのである。
内ふところから手を出して顎を撫でながらにやにや思い出し笑いをした。実はあれから、再びそっと寺の塀の横から顔を出して見ると、島田と倅が並んで、あっちへ行って終う。暫く後をつけたが、島田はふり返りもしないし、倅を呼ぶ訳にも行かない。とうとう道場へ送り込んで終った。
——べら棒な話よ、島田奴、田舎者の分際で男谷の弟子共は元より方々の道場の名のある奴らをいじめるので、みん

なぶるぶる恐がっているから、一つ仁輪加がかりで浅草から吉原へでも引きずり込んでこっちの威勢を見せ、毛肌の立つ程弱らせてやろうと緋縮緬の長襦袢を無理算段の工面をし、木刀などをさし込んで出かけたが、却ってこっちが倅に脅され損った、どうにも麟太郎にゃあ叶わねえ――、そう思い出すと、おかしいやら、少しは口惜しいやらで、小吉は、くすぐったい気持がしていた。

島田をおもちゃに出来ないとなったら、急に今夜の市のことを思い出した。

蔵前で身代限りをした奴がある。そ奴のだいぶいい家財道具一切と、刀もいいのが十口ばかり寄るし、お茶師でこれ迄同じ道具屋をやっていた奴の娘が上方の国詰ものの囲い者になってあっちへ行くのでそれと一緒におやじも行くとかで、その手の品を、一つ残らず出すのだから、是非、今夜は先生も来て下さいと、市の世話焼に、手すりこっぱいで頼まれた事を思い出した。

小吉はいつも、ふところ工合のわるい時は、夜見世へ坐って道具を売る。近頃は、そんなに損もしなくなったが、はじめの頃は、一月に六十両も大損をして、腹でも切るより、首の廻しようが無くなった事さえあるのだ。そんな年貢の納め甲斐か、今では、市へ行っても、別座蒲団が出来ているという幅っ利きだから、島田虎之助というおもちゃを倅に取上げられた面白くない口直しに、思い出して出張ったものである。

真ん中に八間の燈、行燈がいくつもいくつもついて、その下で、世話焼が、皺枯れた声で、仲間同士の付値を叫ぶ。塵がもうもうと立つ。

その往来から、白い着付に同じ袴をはいた顎にちょっぴりと鬚を垂らした年をとった男が、頻りに内を覗いていたが、とうとう、その混雑の中へ入って来て

「恐入りますが勝先生を、一寸」

といった。

＊

小吉が、眼ざとく、それを見つけた。

「おお、長谷川さんじゃあねえか」

その声をきくと、市の人達も、みんな表を見た。

「妙見様の長谷川さんだよ」

如何にも割下水の能勢の妙見の禰宜である。長谷川は恐れ入りながら入って来て、実は朝からあなたの後を追って、とうとう今迄逢えず、へとへとに探しくたびれて、やっと、ここを突留めて参りました、どうぞ一寸、表まで顔を貸してくれという。小吉は今日も妙見の事で遺恨をふくむ小林隼太とあんな喧嘩をした。小林の頓馬奴なにかまたその尻でも持って行きやがったかと思って、直ぐに外へ出た。

前が堅川で、月がぼんやり映っている。
「なんだ、え」
「いや、もう、とんだひどい事になりました」
「なにがだ、え」
「神主様が、口惜しがってぼろぼろ泣いていられましてな」
「だからさあ、なにがどうしたというのだよ」
「御神鏡のことでございますよ。中村多仲のことでございますよ」
「中村多仲ってお前、紀州殿のお金扱いの役人だという奴だな。あ奴がどうかしたかえ」
「その紀州様のお役人が、先生」
「ふん、ひん用師だったというんだろう」
「え？　ひん用師？」
「そうだよ、あ奴あな、おいらあ、はじめから臭せえと睨んでいたんだ。ふだん立派な服装をして、参詣の多いお寺や神社へ出入りをしてな、信心者に化けて、お終いには講金の世話人などになり、金を集め、充分集まったところで、そ奴を持つと、どろんどろんと消え失せては、又、外へ行って、はめる奴よ。一年中、そ奴が商売なんだ。そのはめ仲間が大勢いるし、町同心や岡っ引には手一ぺえの付け届けがしてあって、こっちが泣きっ面で御役向へ駈込んでも、物にはならねえ事にうまく出来ているものなんだ。お前がところで、御神鏡一面の御寄進についてくれというから、おいらあ、ああして講中を募り十二両の金を集めたが、あの時、あの中村多仲が、何よりの事だから、わしも加入いたしましょうと、三両ぽーんと寄進についた。お前らは喜んだが、おいらあ、あん時に、こ奴あ臭せえと思ったんだ。それになんじゃあねえか、お前ら十二両で出来る御神鏡を、序手だから、もう十両も集めてえと、小林隼太へ頼み込み、あ奴に、みすみす二両もくすねられ、あ奴とおいらの喧嘩になった。神に仕えるお前らが、そんな汚ねえ根性っ骨じゃあ、ひん用師に、はめられるのは神の罰、当たり前さ」
「そ、そう申されましては、なんとも口が開かれませんが、せ、先生。集まったお金の二十両、一文残らず持って行かれて終いまして」
「それあそうだろう。まだお前ら身の皮を剝がれねえのが、めっけものだ」
「せ、先生、先生」
「うるせえね、その先生に、なにをどうしろというんだえ、おいらあ、もうなんにも知らねえよ」
「せ、先生、先生に、そう無愛想に致されましては、この長谷川が、神主様へ死んで申訳を致さなくてはなりませ

ん。あの人は立派な人だ、あの人へお頼みなされと神主様へおすすめしたのが、このわたくしなのでございますから」

*

「死んで申訳か、そ奴も結構、おいらもさんざ度々用いた手だ。お前はもう年だ、死んだ方がいいかも知れねえ。おいらも、もう道楽の仕度え放題を仕尽して、隠居どころか三年も座敷牢へ入れられた馬鹿だ。別して、この上この世に望みはなし、生きていれあ却って倅の出世の邪魔になる。死んだ方がいい、いいとは思っているが、さて、人間、並々の修行じゃあ、死ぬといって自分では死ねねえものだ。お前が、二十両位の金の事で死ぬというなあ見上げた量見、お前が死んだら、妙見様の禰宜さんは立派なものだ、偉えものだ、実はこれこれでと、おいらが、江戸中を吹聴して廻ってやる故、安心して死んだがいいよ」

「せ、先生、先生、そ、それあ余りお情ないというものです」

「情ねえ事あねえだろうじゃあないか」

「わたくしに死ねとおっしゃいますか。ようございます、死にます、それでは死にます」

禰宜は、頭をふり乍ら、そういって一度、行きかけたが、また戻って、わっというと、其処の地べたへうつ伏して終った。

小吉は、にやにや笑いながら、また市の方へ引返して来た。世話やきが、刀をせっている。小吉はそれを指さして、

「どうれ、おいらに見せな」

引取って、一応、拵えを見てから、すっと抜いて、ちょいと八けんの燈に照らして見たが、

「いけないよこれあ。一合すると直ぐ折れるから、こ奴を売っちゃあ買った奴が酷い目を見る。売らねえ方がいいよ」

「といったところで、商売物を捨てる訳にも行かないでしょう」

「そんな金火箸にも劣る物あ捨てる方がいいよ。いつも云っているじゃあねえか、武士の腰の物は、本当は自分を守るんじゃあない。正しいという事を守るものだ。古道具屋などといういかさま臭せえ商売をしていても、武士の守るその正しいという事には、一人残らず味方をしなくちゃあならねえ、武士道具だけはいかさまをするなといってある。あ奴だよ、え、そのいかさま刀あお蔵にしな」

「さようですか」

いやだなんぞといったら、小吉は、なにをやり出し、またなにを云い出すか知れない、少くとも、いやだといった

が最後、今夜の市の壊れるのは明らかだ。世話やきは、それを、誰やらへ渡して、蔵って置けと云いつけた。

禰宜が、そっと、また人混みのうしろから顔を出した。

「先生」

それから、幾十遍、呼んだか知れない。が、小吉は、一度、ちらりと、それを見ただけで、返事もしなかった。

禰宜は、とうとう諦めたか、すごすごと帰って行くようであった。

小吉が、本所入江町の家へ戻ったのは、もう、真夜中といってもいい位の刻限。小さな行燈の傍らに、麟太郎は母のお信とただ二人。母は、麟太郎の着物の袖の辺りをぬい、着がえのない麟太郎は、白木綿の繻袢一枚に、袴をつけて、今日借りて来た漢書をよんでいた。

お信は、小吉より一つ二つの年上に見える。

*

「どうだ剣術の方は近頃」

と、小吉は、麟太郎へ云いながら、お信の脇へ胡坐をかいた。そして、今、市から持って来たいくらかの金を膝の上へ投げてやった。お信は、にっこりして、無言のまま頭を下げた。

ひどい貧乏をしているようである。畳もぼろぼろだし、襖も障子も破れ放題というのであろう。

「やっています」

と麟太郎は素直に答えた。

「一生懸命やれよ、島田は生一本だ。いい師匠だよ」

「はい。お父上は、先生にお逢いなさいましたか」

「う、う、そ、それ。その丁度、今日、新堀へ行ったんでな、ちょいと、なあにちょいとな、挨拶に顔を出して、序手にいろいろ話して来たよ」

「それは有難うございました。何刻頃でございましたか」

「え、さあ、あれあ、何刻頃だったっけなあ」

「わたくしは、今日、道場のかえりに、抹香橋の御組屋敷へ寄り、七つ刻過ぎに、堀端を通りましたが、あすこに、侍同士の喧嘩がございました。お父上は御覧になりませんでしたか」

「え、け、け、喧嘩。知らなかったなあ。ど、ど、どんな奴らだえ」

「さあ」

麟太郎は、皮肉そうな眼つきで、父を見上げたが、それ切り黙って終った。

行燈が、じじい――っと鳴った。

「寝ないのかえ」

小吉は、お信が、二人の話をさえ聞いていないように、熱心に、着物をぬっているのを見て、そういった。

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.c